

岩見沢校における「へき地・小規模校教育実習」の現況と課題

北海道教育大学岩見沢校

村田文江

はじめに

“へき地実習”は、岩見沢校の特色として言挙げされるものの一つである。受験生が、志望動機にへき地教育への興味・関心をあげることも少なくない。いわく、「へき地教育に興味があり、ぜひへき地実習に行きたい」等々。ただし、“へき地実習”はへき地校へ出かけて実地に学ぶという意味での呼び名であって、カリキュラム上の「教育実習」ではなかった。

平成11年度からの学校教育教員養成課程への改組にあたり、岩見沢校の特色として内外の期待を集める“へき地実習”の見直しをはかった。その結果、教育実習を再編し、主免許の小学校教育実習（6単位 3年次）と副免許の中学校教育実習（2単位 4年次）を必修とするほかに、へき地教育実習（2単位 2年次）と小規模校教育実習（2単位 4年次）を選択履習できるようにした。ここに“へき地実習”は、名実ともに「教育実習」として位置づけられた。

それにともない、運営は教育実習委員会が所管することになった。私は、たまたま11・12年度の教育実習委員長を務めたことから、長い歴史をもつ“岩見沢校のへき地実習”をふりかえりつつ、平成12年度の実施経過と今後の課題を整理しておきたい。

1. “へき地実習”の歩み

岩見沢校におけるへき地教育の教育研究については、すでに笹嶋勇治郎、渡邊守夫、佐藤有の諸先生による論考がある*。ここでは、“へき地実習”の変遷を運営の面から概観してみたい。

* 笹嶋勇治郎「実地指導導入による「へき地・複式教育」に対する授業改善の試み」『年報いわみざわ』創刊号 1979年／渡邊守夫「教育実地研究「へき地・複式教育」の実際について」『年報いわみざわ』2号 1980年／佐藤有「へき地学校教員養成課程の現状報告—北海道教育大学岩見沢分校における「へき地教育実習」「複式教育実習」の試み—」『環北太平洋の地域研究と異文化理解教育』 1994年

講義科目名、受講学生数、実習協力校を整理すると、これまでの歩みは、前史をふくむ四つの時期に区分することができる（資料1参照）。

(1) 前史 講義「僻地教育」のころ：昭和52年度まで

昭和30年代初め、岩見沢分校（当時）は、僻地教育研究所（当時）のなかでも先進的な調査研究に取り組む分校であった。それを牽引したのは、教育学の奈良一三先生である。占冠村、日高町、大滝村につづく幌加内町母子里の調査は、昭和40年の全学プロジェクト「僻地社会の開発計画と生活設

資料1

岩見沢校の「へき地実習」のあゆみ

講義科目名	年度	受講学生数			協力校数(日数)
		2年次	4年次	計	
「僻地教育」 区分：教職専門（自由選択）	昭和52年度 まで				
集中講義「へき地教育」・「複式教育」 区分：教育専門（選択必修）	昭和53年度	9名	10名	19名	幌加内町7校(3泊4日)
		(1年次8名)			
	54	24	16	40	幌加内町6校(3泊4日)
	55	32	23	55	幌加内町5校(3泊4日)・積丹町4校(3泊4日)
	56	43	23	66	幌加内町5校(3泊4日)・積丹町5校(3泊4日)
	57	27	38	65	幌加内町5校(4泊5日)・積丹町4校(4泊5日)
	58	22	48	70	幌加内町5校(3泊4日)・積丹町5校(3泊4日)
	59	30	40	70	幌加内町5校(4泊5日)・積丹町5校(3泊4日)
	60	40	30	70	幌加内町5校(4泊5日)・積丹町5校(4泊5日)
	61	38	32	70	幌加内町5校(4泊5日)・積丹町5校(3泊4日)
	62	33	34	67	幌加内町5校(4泊5日)・積丹町4校(4泊5日)
	63	45	30	75	幌加内町5校(4泊5日)・積丹町5校(4泊5日)
	平成1	42	31	73	幌加内町5校(4泊5日)・積丹町5校(4泊5日)
	2	38	30	68	幌加内町4校(3泊4日)・積丹町5校(4泊5日)
	3	40	27	67	幌加内町4校(4泊5日)・積丹町5校(4泊5日)
4	41	27	68	幌加内町4校(4泊5日)・積丹町5校(4泊5日)	
5	44	24	68	幌加内町4校(4泊5日)・積丹町5校(4泊5日)	
6	30	23	53	幌加内町4校(4泊5日)・積丹町5校(4泊5日)	
7	16	26	42	幌加内町4校(4泊5日)・積丹町5校(4泊5日)	
「複式教育」を「小規模校教育」に名称変更	8	37	25	62	幌加内町4校(4泊5日)・大滝村1校(4泊5日) 岩見沢市2校(5日通学)
	9	44	30	74	幌加内町4校(4泊5日)・大滝村3校(4泊5日) 岩見沢市2校(5日通学)
	10	46	32	78	幌加内町4校(4泊5日)・大滝村3校(4泊5日) 岩見沢市2校(5日通学)
	11	47	27	74	中頓別町1校・月形町1校で試行(6泊7日) 幌加内町4校(4泊5日)・大滝村3校(4泊5日) 中頓別町1校(6泊7日)・月形町1校(6泊7日) 岩見沢市1校(6日通学)
「へき地教育実習」・「小規模校教育実習」 区分：教育実習（選択）	12	49	35	74	幌加内町4校(4泊5日)・大滝村3校(5泊6日) 中頓別町1校(6泊7日)・月形町1校(6泊7日) 夕張市1校(6泊7日)・岩見沢市1校(6日通学)

計に関する教育的実験研究」に発展していった。

奈良先生は、その後も分校内の関心を持続させるべく、教官による“へき地宿泊研修”を実施し、毎年、20人前後の分校教官が参加したという。一方、学生に対しては教職専門の科目（自由選択）として「僻地教育」を開講し、51年度まで担当した。

奈良先生が退官した52年度は、学校教育系の教官が共同で「僻地教育」を担当した。笹嶋先生によれば「奈良教授ほどの実践研究のキャリアがなく、せっかくの講義も色褪せるばかりであった」というが、新しい講義科目としてリニューアルするチャンスでもあった。折しも、岩見沢分校は、昭和53年度から小学校教員養成課程のみで再出発することになっていた。新しいカリキュラムを構想するなかで、へき地校において実地指導を行う「へき地教育」・「複式教育」を教育専門科目（選択必修）として新設することになった。いわば、かつての教官を対象とした“へき地宿泊研修”の学生版である。

新設科目のねらいはこれに止まるものではなく、「教育実習のあり方、教職教育のあり等、初等教育教員の養成に相応しいカリキュラムの作成、授業改善という観点から検討された」ものであった。とくに教育実習の観点からは、「観察参加も含めて、1年次から4年次までの全期間にわたって継続的に実施することを基本にし、3年次6週間の教壇実習を中心にその事前事後指導を強化する」構想をもっていた。そのため、2年次に「へき地教育」、4年次に「複式教育」を開講して、教育実習の体系化をめざしてもいた。

(2) 集中講義「へき地教育」・「複式教育」のころ：昭和53年度～平成7年度

昭和53年、「へき地教育」と「複式教育」は、教育専門科目（選択必修）の集中講義として、次のような趣旨をもって開講された。

へき地教育：2年次を対象とし、理論的な概論とあわせて、学校、子ども、教師、地域に直接ふれるなかで、へき地教育についての一般的認識を得る。

複式教育：4年次を対象とし、へき地教育の認識を土台にしながら、複式授業の教壇実習を行う。

講義内容は、大学での事前指導と幌加内町の協力校における実地指導で構成し、大学教官ならびに協力校の全教職員が指導にあたった（当時のようすは、笹島、渡邊両先生の論考を参照されたい）。実施時期は、主免の小学校教育実習（3年次履習）が行われる9月の夏休み期間中とした。

「へき地教育」・「複式教育」の講義は、すぐに学生の注目するところとなり、翌54年度は150名余りの受講希望があったという。そのため、56年度からは積丹町の協力校が加わって、毎年70名程度の受講定員を確保できるようになった。同じ時期に行われる小学校教育実習に対して、“へき地実習”の呼び名が定着するのはこの頃であろうか。

全体の運営は、学校教育系（教育学、心理学、総合教育）の教官が共同で担当したが、他系の教官（希望者）も指導教官として参加し、学生と寝食をともにした。

宿泊をとまなう実地指導では、交通手段と宿舎の確保が不可欠である。前者については、大学のバスを使用することで費用の軽減をはかった。宿舎については、幌加内町の場合は協力校に近接する公民館、生活改善センターなどを借りて自炊することとした。積丹町では、町研修センターにおける合

同合宿であったが、宿舎と学校が離れているため、学生の通学には町のスクールバスを利用させてもらうことになった。

その後、積丹町における“へき地実習”は、児童数が減ったことによって受け入れ学生数が限られるとともに、現地での通学上の問題もあり、平成7年度をもって終了した。

ちなみに、この時期の運営を担った渡邊守夫先生は平成6年、笹嶋勇治郎先生は平成7年に退官されたが、渡邊先生が、毎年、精魂込めてつくったガリ版刷りの事前指導資料は、今日もなお運営の指針となっている。

(3) 模索、試行のとき：平成8～11年度

積丹町にかわる協力校は、門脇正俊先生の尽力によって、胆振管内大滝村1校および岩見沢市内2校で受け入れることになった。大滝村とは、かつて調査研究を行った経緯や、総合教育研究室が北大セミナーハウスで合宿研修を行う際に、学校訪問を続けてきたことなど、これまでのつながりがあった。岩見沢市内については、従来の遠隔地という枠を見直し、今後、都市近郊においても小規模校化がすすむことを視野に入れたものである。ちなみに、9年度から「複式教育」の名称を「小規模校教育」に変更した。

大滝村では、9年度から2校が協力校に加わり、学生の受講希望に応えられるようになった。ところが、宿舎の北大セミナーハウスからの登下校は困難をきわめたため、窮余の策として門脇先生が大学のワゴン車で送迎するという、運営上の問題をかかえることにもなった。

児童数の減少は幌加内町においても著しく、当初7校あった協力校は統廃合によって4校となり、さらに児童数10名以下の極小規模化がすすみつつあった。当然、受け入れ学生数には限りがあった。また岩見沢市の2校も、統合によって1校となることが決定していた。

そのため、新たな協力校を開拓するべく、10年度には、宗谷管内中頓別町1校と空知管内月形町1校において、“へき地実習”を試行した。幸い、学生たちの真摯な態度が評価されて、いずれも協力校として現在に至っている。

全体の運営は、10年度まで学校教育系の教官が担っていたが、指導教官については他の系からの希望者が減少して、指導教官の配置にも頭を悩ます状態となっていた。減少傾向はさまざま要因を含んでいるが、最大の課題は、四泊五日の長期にわたる滞在とそれに対する旅費の手当てが十分ではないことであった。

こうしたさまざまな課題をかかえながら、11年度に学校教育教員養成課程が発足した。この年は新旧カリキュラムの移行期にあたるので、講義科目名はこれまで通りにしたが、運営は新体制で取り組むべく、教育実習委員会のへき地部会が担当することになった。各系から選出する実習委員は、へき地教育との関わりを持つ教官であるとは限らない。言うなれば、この分野については素人である。へき地部会としては、これまでの蓄積に学びつつ、協力校との諸連絡、事前指導などを組織的に運営するための模索、試行をくり返した。

(4) へき地教育実習・小規模校教育実習となって：平成12年度～

平成12年度は、新カリキュラム「へき地教育実習」の初年度にあたる。4年次は旧カリキュラムの

移行期にあたるが、実質的には「小規模校教育実習」として運営した。

実習の趣旨そのものは昭和53年当時と同じだが、以下のような表現に改めた。

へき地教育実習：2年次学生を対象とする。へき地の学校、子ども、地域の実際に触れることによって、へき地教育についての実践的な認識を深めるため、観察参加を中心に実習を行う。

小規模校教育実習：4年次学生を対象とする。「へき地教育実習」や3年次における「小学校教育実習」の経験をふまえて、複式授業または少人数学級について実践的な認識を深めるため、観察参加と教壇実習を行う。

協力校の開拓は依然として課題となっており、実習委員の能條歩先生（理科教育）の紹介によって、新たに夕張市での受け入れが実現した。

一方、幌加内町では新年度に入ってから学級減が生じたため、受け入れ学生数を維持するのが難しくなった。幸いにも、12年度にはじめて複式学級を設置した幌加内小学校に協力校を引き受けていただいたことにより、学生数を減らすまでには至らなかった。

12年度の運営については、次節以降で述べたい。

2. 指導計画立案から事前指導まで

指導計画の立案はすでに前年度から始まっている。とくに、実習期日は、2月ころに決まる各学校の年間行事予定をふまえて調整しなければならない。

平成12年度は、へき地部会実習委員の交代がなかったため、前年度末から新年度当初にかけての業務は比較的スムーズに進行した。事前指導までの経過を時系列で示すと、以下の通りである。

- 1月中旬 協力校と関係教育委員会に実習依頼（期日と受け入れ人数）文書を送付。
- 2月中旬 大滝村校長会の席を借りて運営協議。実習期日を決める。
- 3月下旬 各協力校の実習期日が確定する。
- 4月上旬 教育実習委員会で、指導計画案と年間予定を提案する。
- 5月10日 学生に対して協力校・実習期日・定員（資料2参照）、および今後の予定を掲示し、受講申し込みの案内をする。学生は、市町村名に希望順位をつけて申し込む。
- 5月31日 受講申し込みを締め切る。
- 6月7日 ガイダンス

○受講申し込み人数を発表して、以下の要領で受講生を確定する。

- *第1希望が定員を満たしている場合は、決定。
- *第1希望が定員を超えている場合は、抽選。
- *第1希望が定員に満たない場合は、第2希望から抽選。
- *事前に連絡のない欠席者は、抽選に参加する権利はない。

○12年度の場合、定員72名（2年次47名、4年次25名）に対して、117名（2年次83名、4年次34名）の申し込みがあった。平均倍率は1.6倍だが、抽選になったのは岩見沢市、幌加内町および大滝村の4年次、月形町2年次である。

資料2

平成12年度『へき地教育実習』・『小規模校教育実習』

北海道教育大学岩見沢校

学校名		4年次		2年次		計	期 間	交通手段・宿泊など
		男	女	男	女			
宗谷管内中頓別町	敏音知小学校 (3学級)	2	1	2	6	11	8月30日(水) ～9月5日(火)	交通費：JR & バス 滞在費：コテージ使用料 自炊、給食費、教材費 費用：約3万円
胆振管内大滝村	大滝小学校 (3学級)	1	2	1	5	9	8月31日(木) ～9月5日(火)	大学バスで往復 大滝セミナーハウス 費用：約8千円
	優徳小学校 (3学級)	1	3	2	6	12		
	北湯沢小学校 (3学級)	—	3	2	4	9		
岩見沢市	メープル小学校 (4学級)	2	2	5	3	12	9月11日(月) ～16日(土)	通学(路線バス) 給食費など
空知管内月形町	昭栄小学校 (3学級)	1	—	2	—	3	9月24日(日) ～30日(土)	学校の研修室(和室) 寝具持ち込み、自炊 費用：約5千円
空知管内幌加内町	沼牛小学校 (3学級)	1	2	2	1	6	9月25日(月) ～29日(金)	大学バスで往復 校区ごとの公民館など 自炊 費用：約6～7千円
	幌加内小学校 (6学級)	—	1	—	1	2		
	政和小学校 (1学級)	—	1	—	1	2		
	朱鞠内小学校 (2学級)	1	1	1	1	4		
夕張市	滝の上小学校 (3学級)	—	—	2	2	4	10月15日(日) ～21日(土)	交通費：JR & バス 宿舎 阿部宅：自炊 費用：約6～7千円
合 計		9	16	19	30	74		

- ガイダンス終了後、へき地部会が学生の配属校を決める。その際、男女比、専攻のバランスを配慮する。また、4年次については、2年次と同じ学校を希望する場合は優先する（子どもたちにまた行くことを約束しているため）。

6月28日 オリエンテーション

- 当日、配属校を発表し、実習代表を選出する。
- この日、受講生に伝える内容は、以下の通りである。
 - *協力校への交通手段、宿泊施設、費用などの事前情報資料。
 - *掲示は、へき地教育研究施設資料室の廊下に統一する。
 - *7月以降、協力校からくる配属学年・教科別指導単元などの事前情報は、すべて掲示で行う。
 - *掲示板の「学校便り」を読んで、学校や子どもたちのようすを把握しておく。
 - *前年度までの各種資料は、へき研資料室で閲覧できる。
 - *事前に学校へ送付する「受講調査票」を記入する。
- “へき地実習”を体験した4年生に、学校でのさまざま活動、心構え、事前に準備するものなどについて話をしてもらった。

7月上旬 協力校へ、学級配属に資する学生名簿と「受講調査票」を送付する。

8月24・25日 事前指導（午前中に2コマづつ）

- ◇事前指導の講義に先立ち、2回目のオリエンテーションを行なう。
 - 当日に配付した『事前指導資料』の内容は以下の通りである。
 - ・平成12年度「へき地・小規模校教育実習」実施計画
 - ・実習校の概要（資料3参照）
 - ・岩見沢校のへき地実習の歩み
 - ・「へき地教育」・「複式教育」等に関する基本的用語
 - ・複式学級における授業の指導案の一例
 - ・関係法規：へき地教育振興法・施行令・施行規則／過疎地域活性化特別措置法
 - ・「太陽となろう」－へき地教師の歌
 - 協力校から届いている資料や指示事項を配付、伝達する。
 - 自炊計画、共通に準備する教材・教具などの打ち合わせを行うよう指導する。
 - 「実習手帳」を配付し、書き方を指導する。
- ◇事前指導の講師は、千葉垂穂先生（元三笠市立岡山小学校長）に依頼して、長年にわたるへき地小規模校での教育実践について講義していただいた。

以下は、受講生の感想である。

* 私はずっと前から「わたり」や「ずらし」はどうすればよいのだろうか、複式教育についての不安があったのですが、先生の話の話を聞いているうちに、大・中規模学校と小規模学校の違いなどは、1週間でわかるようなものではなく、また根本的な教育のあり方は、学校の大きさなんて関係しないと感じました。短い期間なので、子どもたち一人ひとりについて理解することを大切に

平成12年度 へき地・小規模校教育実習 実習校の概要

*中頓別町立敏音知小学校

学校規模	教職員	学級編成	児童数						
			1年	2年	3年	4年	5年	6年	
へき地 3 級 3 学級 計 9 名	校長・教頭 教諭 2 講師 公務補 計 6 名	1・2年学級 3・4年学級 5・6年学級	男	1	-	-	2	1	-
			女	1	2	1	-	-	1

*大滝村立大滝小学校

学校規模	教職員	学級編成	児童数						
			1年	2年	3年	4年	5年	6年	
へき地 2 級 3 学級 計 3 3 名	校長・教頭 教諭 3 養教 事務 公務補 計 8 名	1・2年学級 3・4年学級 5・6年学級	男	2	1	1	2	5	4
			女	4	-	1	6	4	3

*大滝村立優徳小学校

学校規模	教職員	学級編成	児童数						
			1年	2年	3年	4年	5年	6年	
へき地 2 級 5 学級 計 3 3 名	校長・教頭 教諭 5 養教 事務 公務補 計 10 名	1年学級 2年学級 3・4年学級 5・6年学級 障学(1年)	男	5	1	1	4	5	3
			女	2	2	1	5	2	2

*大滝村立北湯沢小学校

学校規模	教職員	学級編成	児童数						
			1年	2年	3年	4年	5年	6年	
へき地 2 級 3 学級 計 1 6 名	校長・教頭 教諭 3 養教 事務 公務補 計 8 名	1・2年学級 3・4年学級 6年学級	男	2	-	2	4	-	2
			女	1	2	-	1	-	2

*月形町立昭栄小学校

学校規模	教職員	学級編成	児童数						
			1年	2年	3年	4年	5年	6年	
へき地 1 級 3 学級 計 1 2 名	校長・教頭 教諭 2 養教 事務 公務補 計 7 名	1・2年学級 4年学級 5・6年学級	男	1	2	-	2	1	1
			女	1	3	-	1	-	-

*岩見沢市立メープル小学校

学校規模	教職員	学級編成	児童数						
			1年	2年	3年	4年	5年	6年	
4 学級 計 3 6 名	校長・教頭 教諭 5 養教 事務 業務主事 計 1 0 名	1年学級 2年学級 3・4年学級 5・6年学級	男	3	3	-	3	4	4
			女	3	3	4	2	5	2

*幌加内町立沼牛小学校 ホームページ www2.ocn.ne.jp/~numasho/

学校規模	教職員	学級編成	児童数						
			1年	2年	3年	4年	5年	6年	
へき地 2 級 3 学級 計 9 名	校長・教頭 教諭 2 事務補 公務補 計 6 名	1・2年学級 3・4年学級 5・6年学級	男	1	1	1	1	1	-
			女	-	-	1	-	1	2

*幌加内町立政和小学校

学校規模	教職員	学級編成	児童数						
			1年	2年	3年	4年	5年	6年	
へき地 3 級 1 学級 計 3 名	校長 教諭 1 事務補 公務補 計 4 名	2・4年学級	男	-	2	-	-	-	-
			女	-	-	-	1	-	-

*幌加内町立幌加内小学校

学校規模	教職員	学級編成	児童数						
			1年	2年	3年	4年	5年	6年	
へき地 2 級 6 学級 計 5 5 名	校長・教頭 教諭 6 養教 事務 事務補 公務補 計 1 2 名	1年学級 2年学級 3・4年学級 5年学級 6年学級 障学(3年)	男	5	2	-	3	8	5
			女	5	6	5	6	4	6

*幌加内町立朱鞠内小学校

学校規模	教職員	学級編成	児童数						
			1年	2年	3年	4年	5年	6年	
へき地 3 級 2 学級 計 1 1 名	校長・教頭 教諭 2 事務補 公務補 計 6 名	1・2年学級 3・6年学級	男	2	2	4	-	-	-
			女	1	-	1	-	-	1

*夕張市立滝の上小学校

学校規模	教職員	学級編成	児童数						
			1年	2年	3年	4年	5年	6年	
へき地 1 級 3 学級 計 7 名	校長・教頭 教諭 2 事務 事務補 公務補 計 7 名	1年学級 3・4年学級 5・6年学級	男	1	-	1	2	-	1
			女	1	-	-	-	1	-

して、あれもこれもとあまり欲張らないようにします。昨年の実習の時に反省したことをくり返さないように心がけたいです。(4年)

* この2日間の講義を通して、教育するということは教師一人で行うことではなく、生徒、子どもたちと一緒に作り上げていくものであるということを再認識しました。複式であろうが普通学級であろうが、子どもたち自身に違いはないのだということ、教師のちょっとした配慮が必要であるということがわかりました。短い実習期間の中で、色々なことを学び、そして今の自分にできる何でもいから一つはみつけだして行うことができればいいと思います。先生の講義内容を少しでも自分で感じてきたいと思います。(2年)

3. 実習期間中の学生たち

(1) 実習内容

協力校における学生への指導は、それぞれの学校が作成した実施要項にもとづいて行われる。1週間という短い期間ではあっても、指導内容は主免許の教育実習と同じく、学校経営等の講義、授業参観、学級活動、給食指導、課外活動の多岐にわたっている(資料4参照)。

4年次の学生は、着任早々から教壇実習にむけての教材研究がはじまる。2年次の学生は、授業参観を通して教科指導の実際を学ぶことにしているが、協力校の配慮によって教壇実習を体験するもの

資料4

平成12年度 教育実習の日程

日程 日課	第1日目 9月25日(月)	第2日目 9月26日(火)	第3日目 9月27日(水)	第4日目 9月28日(木)	第5日目 9月29日(金)
8:10~ 8:15		職員朝会	職員朝会	職員朝会	職員朝会
8:15~ 8:25		短学活	短学活	短学活	短学活
8:25~ 9:10		1校時 講義	1校時 授業参観	1校時 授業参観	1校時 授業参観
9:20~ 10:05		2校時 授業参観	2校時 授業参観	2校時 授業参観	2校時 授業参観
10:30~ 11:15		3校時 授業参観	3校時 授業参観	3校時 授業研究	3校時 集会(実習生企画)
11:25~ 12:10		4校時 授業参観	4校時 授業参観	4校時 授業研究	お別れ式 進行(木村)①学校長挨拶 ②指導教員挨拶 ③教生代表挨拶 ④児童代表挨拶 見送り JRバス12:08
12:10~ 13:15	到着<バス時刻> 12:21 宿舎案内<田辺> 12:30 職員紹介<職員室>(工藤)13:00 対面式<体育館> 13:20	給食・清掃	給食・清掃	給食・清掃 ☆児童午前授業	
13:20~ 14:05	☆進行(木村) ① 学校代表挨拶(工藤) ② 指導教員挨拶(前田) ③ 教生自己紹介(全員) ④ 児童代表挨拶(増井悠)	教材研究	指導案作成	全体研修 13:20~ 職員体育 PG・ミニバ 15:30~ 懇親会(一心会) 18:00~	
14:15~ 15:00	対面式終了後<集会活動> 児童の下校後教生への日程説明と 指導教諭のオリエンテーション <各教室>(担任) ☆宿舎に移動 ☆入浴(政和温泉)500円		☆入浴?		諸費 ・寝具借り上げ代 (682円) ・給食費(786円) ・懇親会費(1000円)

も少なくない。担任の先生に励まされてはじめての指導案をつくり、いざ子どもたちの前に立つと「頭が真っ白」になりながらも、教職への志向を深める貴重な体験となっている。

中頓別町では、地域を知ることにも重点をおき、放課後に酪農体験を組み入れている。また、実習期間に重なる秋祭りにも参加して、体育館で行う宵宮の出店やカラオケ大会を手伝ったり、例祭では子ども神輿とともに地域をまわるなど、学校をささえる地域の人々と接する場をもうけている。

(2) 実習手帳

実習期間は短い、さまざまな体験を将来の糧とするべく、学生たちには実習手帳の記入を義務づけている。実習手帳には、日誌のほかに講義や研究授業を記録する欄と、実習が終了してからまとめる「教育実習の考察」欄があり、これらは評価の対象となる。

以下は、2年次学生の実習初日の日誌である。

* 今日、歓迎会などの行事において、児童・教職員の皆さんに受け入れていただいたことを大変うれしく思いました。児童の皆が、歌や太鼓の演奏を私達実習生に聞かせてくれたことに、私は心を動かされました。一生懸命になってやってくれたので、それだけで私は胸がいっぱいになりました。

授業参観をした時のことですが、一人一人がよく発言する学級だと感じました。四年生の二人は良いコンビなんだなあとも思いました。3年生は1人ということもあり、先生のおっしゃっていた通り、上の二人に遣り込められて、少しかわいそうな部分も、帰る時に少し見えた気がしました。

実習初日ということで、わからないことが多く、何もできない自分に苛立ちましたが、残りの日で自分にできることをもっと探して、実践していけたら、と考えています。

* 初日の今日は、とにかく学校の生活に慣れることと子どもたちの名前を覚えることに専念した。子どもの名前と顔はほぼ一致したと思う。

小規模校の経験がない僕にとっては、新鮮な事ばかりだった。少人数での授業を見るのは初めてだし、かべのない教室での授業も初めて経験した。解放感があって、とても良いと思った。子ども達はとても元気で、初対面の僕達にでもすぐ話しかけてきてくれて、ひと安心。(中略)

12人しかいないが、学年間の成長の差を感じた。やはり一年生の二人はまだまだ幼いと感じる場面があった。逆に高学年の二人は高学年としての自覚をしっかりと持っていて、学校のリーダー的役割を果たしていると感じることができた。明日は子どもともっと話をして、子どものこと、地域のこと、学校のことを知りたいと思う。

こうした学生の日誌に対して指導教諭からの「助言欄」をもうけているが、記入については負担のかからない範囲でお願いしている(資料5参照)。

(3) “実習生便り”の発行

学生たちは宿泊の利点をいかして、“実習生便り”を発行している(資料6参照)。実習に行く前か

お別れ会の時、教生先生が泣いているのを見て自分たちがそれだけ仲良くなれたんだと思いました。帰りたくないとか、ありがとうとか、また来ると言ってくれた教生先生。ほくも話がいっぱいできてよかったし、とても楽しい日々が過ごせたので一生の思い出として、絶対忘れはしないと心にかたく言いました。

(5) 協力校の先生からの指導・助言

終了後に協力校から返送される実習手帳には、次のような指導の先生からのていねいな指導・助言が記されている。

- * 目標をもった実習、すばらしいことですね。簡単そうですが、「ほめる」ことは、以外と難しいことです。先生が書いている通り、よく見つめなければなりません。どれだけ多面的に見ることができるかがポイントとなります。先生ならきっとできると思います。現場は難しい状況もありますが、今の姿勢を持ち続けていってください。
- * 実習に取り組む姿勢からも、実習手帳に記された文章からも、先生の誠実さが伝わってきました。一人の人間としての自分、教師としての自分…。この悩みは、教師なら誰もが経験することであり、永遠に答えの出せない問題かもしれません。先生がそこでお悩みになるのは、子どもの人間性を大切にしているからこそです。教師として最も大切な資質です。共に学んでいきましょう。そして、いつか、同じ職場で一緒にお仕事ができますことを心から願っております。

4. 今後の課題

以上、平成12年度の実施経過を述べてきたが、運営の基本は、昭和53年度から蓄積してきた遺産を継承したものである。新たに組み入れたものは、実習手帳の配付、事前指導に学外の実地指導講師を配置したこと、専用掲示板をもうけて協力校からの学校便りや資料を見やすくしたことなどである。とくに協力校からの事前情報は、へき研事務室の協力をえて、きめ細かく伝達するように努めた。

また、協力校との連絡・調整については、可能な限り教務係を経由した文書で行ない、教育実習委員会としての運営システムを明確にするように努めた。

今後さらに検討を要する課題としては、以下のことをあげておきたい。

(1) 受講定員と協力校

受講定員は、2学年あわせて毎年70名前後を確保することが慣例となっている。この数字は、協力校の児童数と大学の指導体制をふまえたもので、受講希望は多くとも、やむをえず抽選にしてきた所以である。いつの頃からかどうせ抽選にはずれるからと、逆に受講希望者が減少するようになったが、12年度の場合、とくに2年次学生の希望が例年になく増加している。抽選の際の平均倍率は1.7倍だが、「介護等体験」の日程と重なっている場合は申請できないので、潜在的希望はかなり多いと思われる。

増加傾向がいつまで続くかはわからないが、11年度の改組で教員養成課程の1学年定員が135名になったことにより、単純計算で二人に一人はへき地・小規模校教育実習を受講できるようになってい

る。12年度の実数でみると、2年次「へき地教育実習」47名の受講者は、1学年定員のおよそ35%にあたる。潜在的希望に応えるためには、4年次「小規模校教育実習」で、「へき地教育実習」を受講していないものを優先するなどの工夫が必要となるだろう。

また、現在の受講定員を維持するのであれば、協力校の新規開拓は急務の課題である。とくに幌加内町においては、市街地の学校に複式学級できたように、少子化の趨勢はとどまるところを知らない。これまでの協力校もいっそう極小規模化するため、実習の受け入れ体制を見直す時期にきており、現在、校長会、教育委員会と協議をしているところである。

“へき地実習”が教育実習として位置づいた今、主免・副免の教育実習、障害児教育実習、介護等体験とどのように関連するのかが課題になっている。カリキュラム委員会では、4年間を見通した各種実習の配置についての検討がはじまった。「へき地・小規模校教育実習」についても、改めて受講定員を問い直し、その上で協力校の新規開拓に努めなければならないだろう。

(2) 指導教官の配置

昭和53年度に「へき地教育・複式教育」を開講した当時から、指導教官は講義担当の学校教育系以外からも希望者を募って、協力校ごとに最低1名を配置していた。小学校教員養成課程に改組したばかりの熱気とも相まち、“へき地実習”の支援体制ができていたという。

ところが、“へき地実習”が岩見沢校の特色として定着したころから、指導教官を募るというよりは、個別に依頼するようになった。退官などによる教官構成の変化、主免の小学校教育実習の研究授業と重なる日程、年を追うごとに多忙になってくる校務など、さまざまな要因があった。また、教職専門科目であるがゆえに、学校教育系教官が担当するものという認識が強くなった面もある。しかし、最大の要因は、四泊五日の長期にわたる滞在であることと、それにみあう旅費の保証が十分なされていなかったことにあった。

この問題は、教育実習委員会が学校教育系から引継をうける際の重要案件であった。解決策としては、滞在日数を研究授業にあわせた二泊三日にして教官が参加しやすくすること、教育実習となったからには旅費を分校予算に計上することとした。前者については協力校に了解していただき、後者は分校主事、関係委員会および事務部局との協議をへて、最低の予算を確保しているのが実状である。

とは言っても、12年度もへき地部会委員が個別に口説き落とす作戦が続いている。指導教官の配置については、同じ時期の小学校教育実習とのバランスを考えて、何らかの原則をつくっていかねば、へき地部会を担当する実習委員は毎年悩ましい思いをすることになるだろう。

(3) 事前事後指導のあり方

事前指導の本来的な意味を考えれば、実習に行く前に“へき地教育概論”のような講義を履習させておきたい。12年度の場合は、この講義を実地指導講師にお願いした。2年次学生の場合、教育専門科目の講義でへき地・小規模校教育にふれる機会はあったようだが、この時に初めて知るものが少なくない。4年次学生には、複式の教壇実習にむけて、指導案作成の実際にまでふみこんだ事前指導が必要であることも論を待たない。

しかし、実務を中心にする教育実習委員会が、専門的知見をふまえた事前指導を構想するには荷が

重すぎる。今後は、学校教育系や教科教育の教官に委嘱して検討する必要があるだろう。また、事前指導の内容については、協力校と協議していくことも課題になるだろう。

実習が終了してからは、とくに事後指導はしていない。学生たちは、自主的に協力校と手紙をやりとりしたり、学芸会に出かけていく。あるグループは、卒業式にも行っているようだ。こうした交流は、私の知る範囲でもずいぶん以前から行われていて、先輩から後輩へ引き継がれた“へき地実習”の良き伝統といえよう。

ところが、12年度に協力校から届いた「学校便り」には、次のような一文が添えられていた。

11月に学芸会がありました。実習生が来てくれると待っていた子ども達がおり、がっかりしておりました。約束があったようですが、残念です。(連絡を頂ければよかったです)

学生たちも、その時は行くつもりだったにちがいない。研究室が異なると、顔をあわす機会も少ない。交通の便を考えると、行けなかった理由もそれぞれにあると思う。しかし、約束をたがえた事実、子どもたちの胸に刻まれる。この一文を書かずにはいられなかった先生方の姿を想像すると、大学としての指導の甘さを痛感した。学生たちには、実習代表を通じてこの旨を全員に伝え、どのように対処するかは任せることにした。

このほか、「写真を送ると言っていたが、いまだに届かない」という話も聞いている。オリエンテーションでは、ややもすると実習期間のことばかり強調するが、事後の交流についても指導しなければならない。

(4) 宿泊と通学

運営上の課題として悩まされるのが、宿泊施設である。協力校の地理的条件はそれぞれ多様であり、学生の費用や教官旅費ともかかわってくる。現況では、大滝村を除いて自炊合宿を原則としている。例外として、大学に近い岩見沢市のメープル小学校では自宅通学にしているが、学生の仲間意識が稀薄になる傾向がある。13年度からは、学校の近辺に合宿させることが課題になっている。

宿泊施設は協力校の新規開拓においても大事な要因である。宿泊施設を確保できない場合は、学校が受け入れたくとも断念することになるだろう。

現地における通学も課題が多い。大滝村では、先にふれたように、大学のワゴン車を登下校に利用した。11年度は指導教官の引き受け手がなかったこともあって、へき地部会の実習委員が運転手を務めた。その体験から言えば、指導教官にそこまでの負担を強いることは難しく、ますます引き受け手がなくなる。12年度は、教育委員会の協力をえて、大滝小のみ中学校のスクールバスで通学することにしたが、北湯沢小へはセミナーハウスの自転車を利用しており、雨天の日にはずぶ濡れになったという。この点については、協力校からも改善の要望がでている。

解決策としては、学生の自家用車使用があげられるが、岩見沢校では、例外措置をふくめて教育実習における自家用車使用を認めていないため、今後、さらに検討すべき課題である。

おわりに

先に、教育実習委員会は実務が主であると述べたが、実習委員は年度によって交代することを考えて、誰が担当しても支障のない運営システムをめざしたつもりである。しかし、へき地・小規模校教育実習の場合、協力校が地理的に分散していることもあって、きわめて個別的な対応が必要になる。これまでは学校教育系が継続的に運営してきたので、協力校との連絡・調整においては、顔の見える関係をもつことができた。それが岩見沢校の“へき地実習”をささえてきたと言っても過言ではない。教育実習委員会の所管に移った今、そうした関係をも引き継ぐことができるかどうか、運営上のもう一つの課題である。

学生たちは真摯に子どもたちにむきあい、“へき地実習”をへて変貌する学生も少なくない。こうした学生たちに対する協力校の評価は高いと自負しているが、大学そのものについてはどうなのだろうか。指導していただくばかりで、大学自体が、協力校の教育活動、あるいはへき地教育に寄与しているのだろうか。矛盾するようだが、教育実習委員会の運営システムが整うほどに、大学と協力校との連携のありようを問い質していかねばならないと思う。